



チャイントン MYANMAR

Kyaintong

美しい自然を歩き、
人々の暮らしと出会う旅

ミャンマー東部に位置し、シャン州でもっとも風光明媚な地とされる国境の町チャイントンへ。緑豊かな山村で待っていたのは、大自然とともに昔ながらの暮らしを続ける心穏やかな人々でした。

写真・文／八井麻由美（ピース・イン・ツアー／ミャンマー担当）



タチレクへの入り口



国境に架かる橋



国境を行き交うタイ人

● **タイと国境を接する町タチレク**
 タイの最北端メーサイと国境を接する町。毎日、大勢のミャンマー人がここからタイ側へ出稼ぎに出かける町で、タイ人にとっては買い物スポットとして人気の場所です。町の中はタイ語が通じ、レストランのメニューもタイ語です。ミャンマーにいるのにまるでタイに来たかのように！
 ここでは国境の橋やタロー市場の見学をします。これが国境!? というくらいに幅の狭いサイ川が国境になっています。泳いで渡れそうなくらいです。
 タロー市場には洋服、日用雑貨は

タチレクでの出入国（外国人の場合）
 ミャンマーからタイへ⇒入国不可。
 タイからミャンマーへ⇒入国可。
 方法：イミグレーションにてパスポートを預け許可証を発行してもらう。手数料US \$10
 期間：14日間以内の滞在が可能。ただし、国境から5キロ以内に限られる。チャイントンなど遠方へ行く場合には、ガイドの同行が義務付けられる。
 (2011年7月現在の情報です)

もちろんのこと、中国産の漢方薬、海賊版のDVDやCDなどたくさんの商品が売られています。ミャンマーでもPHONEは今、人気のようでもスマートフォンのコピー商品もたくさんありました。

日	旅のプラン
1日目	ヤンゴンIN
2日目	午前：早朝便にてヤンゴンよりタチレクへ（ヘーホー経由）
	午後：タチレクよりチャイントンへ（約3時間） 着後、アク族集落見学
3日目	朝：チャイントン朝市見学
	終日：ホジン村のアカ族集落トレッキング
4日目	終日：ルイムエ周辺トレッキング（ラフ族&&ワ族&アカ族集落）
5日目	午前：チャイントン市内観光
	午後：エン族&パラウン族集落見学&温泉
6日目	午前：チャイントンよりタチレクへ
	午後：空路にてタチレクよりヤンゴンへ（マンダレー経由）



近くで収穫されたハヤトウリ



マンゴーが売られていました



幼虫を油で揚げたスナック

● タチレクからチャイントンへ

タチレクからチャイントンまでは車で約3時間。チャイントンまでの道は一面、木々の緑と空の青のみでとても爽やかな景色です。

途中、牛の散歩や美しい棚田、採れたてのマンゴーなどが見られ、大都会ヤンゴンから来た身としては澄んだ空気と自然の美しさに心が癒されます。

約3時間車で走るとチャイントンのチエックポイントに到着。ここで外国人は入域の許可申請をします。

チャイントン (kyaingong) はミャンマー東部のシャン州に位置する標高約800メートルの町。「チャイン」はシャン語で町、「トン」はこの地で有名なかつての修行僧の名前を意味します。

チャイントン周辺には40近くの集落があり、アカ族、シャン族、ラフ族、パラウン族、ワ族、アク族、エソン族などの約20の少数民族が生活しているといわれています。彼らの中には、それぞれの言語、文化を持ち、普段から伝統的な民族衣装を身に着けて生活する民族もいます。同じ民族の中でもさらに細分化されており、それぞれ衣装や帽子などで見分

けることができます。

最近ではトタンや瓦造りの屋根が増えてきているとはいえ、きれいに拭かれた茅葺き屋根の家に住み、農作物を育て、自給自足的な生活をしています。茅葺き屋根の家がある景色は、どこことなく日本の田舎の風景のようで、かつてアユタヤ王朝(14〜18世紀)の日本人町から逃げてきた日本人がこの地に住んでいたという話もうなずけます。

● チャイントン散策の楽しみ

チャイントンの町は、半日あればのんびり観てまわれるほどの規模です。

町には昔の城壁が残っている箇所があり、門の保存状態も良好です。マンダレーのマハムニパゴダをそのまま真似て建てられたマハムニパゴダや、約22メートルの立像が立つイエットオームーバゴダなどを見学します。町の南にある丘には高さが約66メートルもある一本杉が立ち、ここは夕陽観賞のベストスポットです。また、ミャンマーに多い若いカップルたちのデートスポットにもなっています。

ノントオン湖は夕涼み場所で、夜



市場で見つけた野菜。豆の一種



もち米で作ったさまざまな食べものを売る女性



買い物にきた少数民族の女性



民族衣装や雑貨も売っています



市場の乾物屋さん

になると喫茶店や屋台が出て少しだけ賑やかになります。
 チャイントン市内の観光でいちばんおもしろいのは、なんとと言っても市場見学です。ここでは、近隣の少数民族も集まり、売り買いをしています。
 日本では見かけないさまざまな野菜やこの地方の人たちが食べる食用の虫、魚、マンマースイーツ、衣服など見ていて飽きないものばかりです。



煙管をくわえたアク族の女性



茅で屋根を葺いた民家



青空に緑豊かな水田が映える



村の教会



家の中には竈があり鉄瓶で湯を沸かす



赤ちゃんを抱く女性

● ワンサイ村・アク族
(Wansai village/Ahkuh)

チャイントンから車で約40分。途中からあまり整備されていないでこぼこ道を車で進みます。車を降りるとききれいな田園風景が広がり、そこから竹の生えた細い道を少し登っていくと村の入り口です。ほとんど歩かずにたどり着くことができます。

アク(Ahkuh)とは「犬」という意味。アク族の特徴は黒っぽい民族衣装に煙管タバコを加えた姿が特徴的です。年配の女性は皆、プカプカといいしように煙管タバコを喫んでいます。

人々の住む家は、茅葺き屋根の家が多く、美しい自然景観とよく溶け込んでいます。村の人口は約150人でキリスト教を信仰しています。村には教会があり、子どもたちの遊び場にもなっています。

夕方前に訪問したため、お邪魔したお宅は夕飯の準備中でした。村には電気もガスもないので、食事の準備もすべて手作業。囲炉裏には火を熾して炊いたもち米がありました。おいしそうに眺めていると、おばあさんが味見をさせてくれました。硬さも程よく、お米の甘さがとてもおいしかったです。



ホーラン村の仏教寺院



黒の衣服をまとったエン族の男性



ホーラン村の子どもたち



美しい帽子をかぶったアカ族の女性

●ホーラン村・エン族
(Horan village/Enn)

チャイントンから車で約40分。アカ族の住むワンサイ村の近くにありますが。この村は仏教徒で村の近くには僧院とパゴダがあります。

エン族の特徴は日本で言うお歯黒の風習が残っているところです。年配の女性の中には歯の真つ黒な女性もいます。エン族は黒い色の洋服を好み、おしゃれの点から歯も黒くします。また、自分たちと動物を見分けるためという理由もあるそうです。

エン族の女性は本当におしゃれが好きです。突然訪問した私にも自分たちの衣装を貸して着させてくれました。数人の女性に囲まれてあつという間に着付けも完了です。その間も「これはどう?」「この子にはこっちが似合う!」とキャッキヤツしながら相談をしています。日本の若い女性とも気が合いそうですね。村の皆さんときれいな民族衣装で記念撮影という貴重な体験をさせてもらいました!

●ホジン村・アカ族
(Hokyin/Akha)

ホジン村はNO1〜4の4つの集

落に分かれて生活をしています。それぞれの集落は山の上にあるため、トレッキングをして各集落をまわります。トレッキングコースは全長約14キロ。少しハードなコースです。

もともとは土着のナツを信仰するひとつの村でしたが、キリスト教の伝来とともにキリスト教徒が増加。それとともにナツ信仰者がNO2の村へ、溢れたキリスト教徒はNO3へと移っていきました。NO4はキリスト教、ナツ信仰者、仏教徒といろいろな宗教の人が暮らしています。

どの集落にもアカ族が暮らし、女性は銀の装飾がされたきれいな帽子を被っています。この帽子には昔の硬貨なども飾りとして使われており、ひとつ500米ドル以上ともいわれるくらい高価なものです。

トレッキングはチャイントンから車で約45分のパンクワイ村から始まります。道中はお茶畑やきれいな棚田を眺めながら新緑の中を進みます。途中、牛や豚、民族衣装を着たアカ族とすれ違ったりと日本では体験ができないトレッキングです。

アカ族はお米を育て、そこから焼酎を醸して生活しています。そのため、山の麓付近にはきれいに手入れ



機織りをするパウツ村の女性



民族衣装の赤と大地の緑が鮮やかなコントラストを描く



ホジン村の民家



ホジン村の子どもたち



なだらかな道をトレッキング



お茶の葉を広げてお弁当

された田んぼがたくさん見られます。道は土の道ですが、比較的平坦で歩きやすく、そこまで急な道を登ったりということはありません。山奥へ入っていくと、松や竹も生えていたりどこか日本にも似た景色に見えてきます。約2時間ほど登っていくとNO4の村に到着です。

ここで市場で買ったお弁当の昼食をとります。シャン州ではもち米が主食で、特にチャイントン周辺の東シャン州ではいろいろな種類のもち米が食べられます。

今回はNO4から3、2、1とまわっていきましたが、各集落間も10〜30分くらいの距離です。キリスト教の村の入り口には木で作られた十字架が掲げてあったり、仏教徒のいる村にはパゴダがあったりと村によって雰囲気は少し違いますが、各集落の子どもたちは山の上にあるひとつの学校に通っています。

● **パウツ村・パラウン族**
(Pauk/Palaung)

チャイントンから車で約45分。パラウン族は腰に金属をはめた民族衣装が特徴的。パラウン族の中でも集落によって、金をはめたり、銀をは

めたりと分かれます。女性の多くは民族衣装をまとい、農作業や機織りをして生活しています。

この村では機織を体験させてもらいました。腰と足で重心を取りながら、パラウン族の女性は慣れた手つきでリズム良く、とても丁寧に織り進んでいきます。私はというと、どこに籽を通したら良いのや…。何度教えてもらってもなかなか覚えられませんでした。民族によって、織物の色合いや模様、刺繍の施し方が違い、パラウン族がまとうえんじ色の織物は、チャイントンの自然の緑とよく合い、とても鮮やかなコントラストが印象的でした。

● **チャイントンに眠る秘湯**

パラウン族の住むパウツ村から車で約10分ほどのところに天然の温泉があります。源泉からは硫黄の臭いがするお湯が沸いていて、温度は約100度とほぼ熱湯です。

日本の一般的な温泉とは構造が若干違い、パイプで各個室へお湯が流ながれています。この温泉は川を車で渡った先にある温泉のため、雨季の雨の多い時期には行くことができません。そのため、雨季は利用者が



お茶の葉を広げて天日で干す



山の斜面につくられたキャベツ畑



途中、牛たちとすれ違いました



イギリス植民地時代の建造物

少ないとのこと。パイプの掃除がされておらず、蛇口をひねると少し茶色のお湯が出てきましたが、乾季にはきちんと掃除されているそうです。温泉で汗を流した後には、温泉卵も食べられます。トレッキングで疲れたからだにはお勧め!?

●ロイモエ (Loimwe)

チャイントンから車で約1時間。ロイムエは「霧に囲まれた山」という意味で標高は約1600メートル。夏でも涼しく、昔は冬になると雪が降っていたともいわれ、日本で言え

ば軽井沢のような避暑地にあたります。この地は、イギリス植民地時代(1897~1948)にイギリス人の居住区として使われていました。その名残がレンガ造りの教会や建物に現れています。ミャンマーが歩んだ植民地時代の歴史や当時の建造物に興味のある方は、楽しめるところでしょう。教会は現在でも使われており、アカ族のシスターがお祈りをしていました。

観光客向けに伝統衣装を身に着ける少数民族は、いろいろな場所で見

かけてきましたが、普段の生活の中で独自の民族衣装をまとい、自分たちの言語で会話をし、自給自足的な生活をしている民族の村々を訪問して感じたのは、いわゆる観光というよりはたくさん家庭訪問をしたような感覚です。

それぞれの集落で家の中に入らせてもらい、お話をしながらお茶や果物をいただいたり、子どもたちと遊んだり、衣装を着させてもらったりと通常のミャンマー観光(パゴダ見学)とは違ったおもしろさがありました。

また、チャイントンはミャンマーの中にあつてミャンマーではないような印象を受けます。歴史や民族の問題もありますが、実際にチャイントンに住む多くのシャン族の人たちは、ヤンゴンを別の国のように話すことがありますし、言語や文化もタイに近く、市場ではタイバーツが使えたりする不思議な場所でした。その点でも、チャイントンはミャンマーの旅をリピートされるミャンマーファンばかりではなく、少数民族に興味がある方、トレッキングや自然が好きの方、ミャンマー滞在を長く取れる方などにはお薦めです。